

理論と実践——ハンス・ヨナスのテクノロジー論を読み直す

Theory and Practice: Revisiting Hans Jonas's philosophy of technology

久保健太

Abstract

This paper offers a reinterpretation of Hans Jonas's philosophy of technology from a novel perspective. While prior research has primarily focused on its ethical dimensions, this study shifts attention to the interaction between theoretical frameworks and practical applications. By analyzing Jonas's ideas through this lens, the study uncovers broader philosophical implications and emphasizes its significance in reexamining the relationship between humanity and the natural world. These insights provide a foundation for envisioning alternative conceptualizations of human-nature dynamics.

(1) 研究テーマ

本稿の目的は、ドイツ生まれの哲学者ハンス・ヨナス (Hans Jonas, 1903-1993) のテクノロジー論を、理論と実践の関係という観点から新たに読み解くことにある。そのために本稿では、先行研究が依拠してきた『責任という原理』(初版 1979 年) や『技術、医療、倫理』(初版 1985 年) だけでなく、これらに先立つ『生命という原理』¹ (初版 1973 年) や晩年の『哲学』(初版 1993 年) といった諸著作を総合的に検討することにより、ヨナスのテクノロジー論が技術倫理にとどまらない、より広い射程をもつことを示したい。

(2) 研究の背景・先行研究

ハンス・ヨナスは、グノーシス研究から生命倫理学に至るまで、実に多様な分野において独自の考察を残した哲学者・倫理学者として知られている。そして、2021 年にドイツで刊行された初の専門事典 (*Hans Jonas-Handbuch*) に「技術哲学 (Technikphilosophie)」という項目が見られるように (HB, 69-74)、テクノロジーもまたヨナスの主要な関心のひとつであった。

ヨナスのテクノロジー論を扱う先行研究の多くは、「ヨナスにとって、技術の問題は何よりも倫理的問題だった」(品川 2013, 111) という立場をとる (vgl. Schmidt 2021, 69)。このような理解ゆえに、「ヨナスには技術のあり方そのものを哲学的に問うという視点は欠落している」(小田 2001, 40) という批

判もなされてきた²。だが、たとえばヨナスの著作『技術・医療・倫理』には「なぜ現代の技術は哲学の対象であるのか」と題された論考が収められているように (vgl. TME, 15-41)、彼が技術を哲学的に問う視点もそなえていたことは疑いえない。とはいえ、すでに見たように、先行研究においてヨナスのテクノロジー論がもっぱら倫理学との関係で扱われる傾向にある以上、彼は「科学技術の問題をもっぱら倫理の問題として捉え」(小田 2001, 40) ている、という小田の評価を無視することもできないように思われる。

他方で、小田はヨナスを次のようにも批判していた。「ヨナスには、自然と人間とのあるべき関係を構想するという視点はない」(小田 2001, 42)。ヨナスは『責任という原理』や『技術、医療、倫理』において、現代のテクノロジーを倫理的に統制する必要を説いており (z.B. vgl. PV, 7; TME, 52)、従来のヨナス研究は「技術から倫理へ」という図式のもとで「なぜ現代の技術が倫理学の対象なのか」を明らかにしてきた。しかしながら、その際なぜわれわれがそれを統制しなければならないのかという問いは十分に検討されてこなかったように思われる。そこで、本稿では「技術から倫理へ」という図式に代え、「理論と実践の関係」という観点から、ヨナスのテクノロジー論を新たに読み直してみたい。筆者の見立てでは、この読解を通じて「技術のあり方そのものを哲学的に問うという視点」を確保することができ、「自然と人間とのあるべき関係を構想する」端緒も開かれるはずである。

(3) 筆者の主張

3-1. テクノロジー論から「理論と実践の関係」の問いへ

死の前年、ミュンヘンで行われたある講演において、ヨナスは次のように語っている。

現代の人類の技術全体と自然環境との衝突という [...] この現象——つまり、今世紀後半の間にますます明らかになり、ついには哲学の視野にも入ることになった、惑星の生態系がわれわれに脅かされているという現象——によって、哲学の最古の問いのひとつである人間と自然の関係についての問いが [...], 思いがけず、まったく新たに立てられたのです (PRV, 31)。

引用から明らかなように、ヨナスにとってテクノロジーとは、「人間と自然の関係についての問い」を呼び起こすものであった。だが、D. J. レヴィが指摘するように、「非人間的自然のテクノロジー的な改変は、はじめから世界に

おける人間の存在様式に刻みこまれている」(Levy 2002, 86)のだとすれば、現代のテクノロジーが惹起する問題に対処するためには、過去の技術との間にある差異を理解する必要がある。そこで以下では、ヨナスによる過去の技術と現代のテクノロジーの区別を概観することで、人間と自然の関係性がどのように変遷してきたのかを見ておきたい。

まず、『責任という原理』における記述を確認しよう。ヨナスによれば、われわれの時代以前の「人間の自然への干渉」は「本質的に表面的なものであり、自然の安定した均衡を破壊するには無力であった」(PV, 19)。このような身の廻り程度の規模における人間の自然への干渉を、彼は「テクネー (*techne*)」として捉える (vgl. PV, 22)。ところが「今日、テクネーは現代の技術という形態において、[人間という]種の果てしない前進衝動へと変わった」(PV, 31. [筆者補足])。さらに、テクネーがもつぱら「都市」や「国家」内部のものだったのに対して、テクノロジーの影響は今日「国家」と「自然」の間の境界を越えた「グローバルな『都市』」に及んでいる (vgl. PV, 20-21; ebd., 33)。以上の指摘には、テクノロジーの影響が空間的な規模を拡大したことが示されている。

後年の『技術、医療、倫理』においては、『責任という原理』では断片的だった技術についての考察が、まとまった形で表明されている。ヨナスによれば、過去の技術が「所有」であり「状態」であったのに対して、現代のテクノロジーは「企て」であり「過程」である (TME, 16)。このような対比を理解するためには、過去の技術と現代のテクノロジーにおける「手段」と「目的」の関係を確認することが役に立つ。

ヨナスによれば、過去の技術の場合には「存在している道具と方法の目録はほとんど変わらず、一般に認められた目的とふさわしい手段とが互いに適合しつつ静的な平衡に向かうのが常であった」(TME, 17)。だが、「このようなイメージとまさに反対のことが、現代の技術には当てはまる」(TME, 19)。すなわち、現代のテクノロジーにおける手段と目的との関係は「一意的で直線的 (*linear*)」ではなく、「弁証法的で円環的 (*zirkulär*)」である (ebd.)。というのも、「技術的な発明という事実によって偶然に生み出された諸目的は、それが社会経済的な生活習慣に組み入れられるや、生活に不可欠なものとなり、そしてその暁には、今後もそれらの諸目的を引き受け、その実現のための手段を完全なものにせよ、という使命を技術に課す」(TME, 20) からである。

以上の議論を踏まえるなら、過去の技術が「所有」「状態」であったのに対して、現代のテクノロジーが「企て」「過程」である、ということの意味は明

らかであろう。すなわち、過去の技術（テクネー）が個々の目的に奉仕するための手段（道具）であって、使用に供されない場合は持ち主に「所有」され一定の「状態」に保たれるという「静的な平衡」を示していたのに対して、現代のテクノロジーは絶えず自己更新する動的な「休みなき『過程という特性』」（TME, 16）をそなえた、人類が参与する「継続的で集団的な企て」（TME, 15）なのである。

さらにヨナスは、手短にはあるものの、「哲学的視点」という節において、現代のテクノロジーがもたらす哲学的な含意についても言及している。

知識に関して言えば、古くからの「理論」と「実践」の区別が双方にとって消え去ったことは、あまりに明らかである。[...] 要するにテクノロジー症候群は、理論的な領域の徹底的な社会化を引き起こし、理論的な領域を公共の需要に対する奉仕に就かせたのだ（TME, 29）。

節題からも明らかのように、この指摘は「技術のあり方そのものを哲学的に問うという視点」からなされたものである。だが、同節はわずか2頁で終わっており、『技術、医療、倫理』において「理論」と「実践」の区別についての立ち入った考察は行われていない。他方で、『生命という原理』に収められたある論考において、ヨナスはこの「理論」と「実践」の関係についての問いに正面から取り組んでいる。そこで本稿では、この論考を手がかりに、現代のテクノロジーにおける「理論」と「実践」の関係を解明し、「人間と自然のあるべき関係を構想する」視座を提示してみたい。

3-2. 「理論の実践的使用について」——人間と自然の関係を再考する

『責任という原理』において、ヨナスは現代の人間が直面する危機の発端を、「自然科学的、技術的、工業的な文明が常軌を逸した点」（PV, 251）に見出している。彼の見立てによれば、このような状況を準備したのが「知を自然征服へと向けること、そして自然征服を人間の運命の改善へとつなげること」を掲げる「ベーコンのプログラム」であった（*ibd.*）。そこで本節では、まず「ベーコンのプログラム」の内容を確認し、次にそのプログラムが孕む問題を指摘する。そして最後に、この問題を克服するためにわれわれが取り組むべき課題を、ヨナスの提案を参照することで明らかにしてみたい。

「ベーコンのプログラム」の嚮導者とされるフランシス・ベーコン（Francis Bacon, 1561-1626）は、『大革新』の序言で次のように述べていた。

今までに諸技術や諸学で発見されたものは、実地の使用・省察・観察や論議することで見出し得たような類のものであった、[…]ところが自然のより離れ、より隠れたものに達しうるその以前には、人間の精神および知性のよりすぐれた、より完全な使用および作用の導入されることが、必然的に要求されるのである（ベーコン 1978, 28）。

この引用から直ちに読み取れるのは、ベーコンが「人間の精神および知性」を高く評価し、それらを動員することによって「より離れ、より隠れた」自然の本性を解明すべきだと考えていた、ということである。ヨナスは「理論の実践的使用について」（初出 1959 年、PL, 311-341 に再録）という論考において、ベーコンによる以上のような主張に、「自然についてのある新しい視点」（PL, 318）を看取した。すなわち、自然に対して人間の精神が称揚されるとき、「自然を意のままにすることは、精神の唯一の所有者としての人間の権利」（*ibd.*）となるのである。

さらに、ベーコンは「知識」とは「人生の福祉と有用のため」に求められるべきであり、しかもそれが「愛のうちに」達成されなければならないのだと「忠告」していた（ベーコン 1978, 32）。ヨナスはベーコンが「愛」を要請していることに着目し、ここに「ベーコンのプログラム」が孕む根本的な問題を洞察する。

理論の使用における隣人愛ないし好意の必要性は、力が本性上善への力であるのと同程度に悪への力でもあることに由来する。[…]理論の恩恵にあずかる知識を補完するためには、好意と責任が外部から呼び寄せられなければならない（PL, 320-321）。

ヨナスによれば、人間の力はその使い方次第で本性上善にも悪にもなりうる。理論に支えられた知という「ベーコンのプログラム」には、人間の能力は「隣人愛ないし好意」に導かれ、善意のうちに使用されなければならない、ということが前提されていた。このことは、近代科学の理論とその実践的使用の間に、人間の行為を善へと方向づける「判断にもとづいた決定」（PL, 326）が絶えず介在することを意味する。だが当然、人間の行為は必ずしも善意によってのみ導かれるとは限らない。否それどころか、たとえ人間の行為が善意に導かれている場合でも、その行為が長期的には破滅を招来することがありうるのだ（*vgl.* TME, 43; *ibd.*, 49）。その原因は、理論を実践へと駆り立てているもの、すなわち現代のテクノロジーを駆動している要因が、テクノ

ロジーそれ自体のうちにそなわっていることにある。ヨナスによれば、「近代科学は理論という目的のために実践を利用する」(PL, 333)のだが、実践が与えた変化がまた理論の対象となり、さらに理論のための新たな道具をも提供することによって、「理論と実践の融合は、たんなる『純粋』科学と『応用』科学という表現では認識させないほど不可分なものとなる」(PL, 334)。しかも、近代科学の理論には終わりが無い。というのも、近代科学は「仮説的な性格」をもっており、「現象を説明し統合する科学的成果」はそれ自体「新たな問題設定の出発点と位置づけられている」(PL, 336)からである(vgl. TME, 26-29)。このように、理論と実践が「不断の循環」(PL, 334)を形成している現代のテクノロジーにおいては、「理論および理論の使用は存在するが、理論の使用についての理論は存在しない」(PL, 327)ことになる。すると、われわれはこの「科学と技術の相互作用による自己制御的な機構」(PL, 338)に身を委ね、事態をただ静観することしかできないのだろうか？

そうではない。ヨナスによれば、「人間の自律と尊厳のために […]」、われわれはテクノロジーの疾走を、テクノロジーの外部から統制しなければならない」(TME, 52)。だが、このことはいかにして可能になるのか。ヨナスの表現を用いて言えば、テクノロジーにおける「不断の循環」を「テクノロジーの外部から統制」するためには、たとえば「好意と責任」のような「理論の使用についての理論」が必要となる。そして私見によれば、この「理論の使用についての理論」を構想するにあたって有益な示唆を与えてくれるものこそ、ヨナスが提示する「人間の像 (das Bild des Menschen)」という概念にほかならない。彼はこの概念を、近代科学の「不断の循環」を指摘した直後に提起している。

しかしながら同時に、人間の真の目的とは何か、真理か有益性か、という問いは、その「真理と有益性の」結びつきという事実それ自体によってはまったく未解決のまま残されており、実践的な要素が目下際立って優勢であるということがその本質に触れるわけではない。その答えは人間の像によって規定されるのだが、われわれはそれを決めかねているのだ(PL, 334. [筆者補足])。

ヨナスによれば、テクノロジーの「自己制御的な機構」を「テクノロジーの外部から統制」するためには、テクノロジーの発展による恩恵の先に、「どのような生が人間にふさわしいのか、という問いを直視しなければならない」(PL, 339)。そして、依然として未決定のままにとどまっている「人間の像」

を彫琢していくためには、人間が自然界においてどのような地位にあるのか、人間は自然に対してどのように関わるべきなのか、という問いに取り組むことが不可欠である。するとここにおいて、われわれは「人間と自然のあるべき関係を構想する」、その端緒へと辿り着いたことになるだろう。

(4) 今後の展望

本稿では、小田によるヨナス批判を手がかりに、ヨナスが実際にはテクノロジーを理論と実践の問題として「哲学的に問うという視点」を有しており、さらに彼の思想が「人間と自然のあるべき関係を構想する」新たな道を拓く可能性をもそなえていることを明らかにした。その際どのような自然観に立脚し、そこに人間をどう位置づけるのか、といった問題については、ヨナスがすでに可能な選択肢を提示してくれている (cf. 久保 2024, esp. 96-98)。

テクノロジーの問題圏から理論と実践の関係へ、そして人間と自然の関係へと問いを深化させていったヨナスの歩みは、「人間の真の目的とは何か」という形而上学的な問いにまで踏み込んでいるがゆえに、非常に広範な射程をそなえている。この問いに答えるためには、彼が提起した「人間の像」という概念を明確にしていく必要があるだろう。もっとも、『責任という原理』という著作の表題にも現れているように、ヨナスが考える「理論の使用についての理論」とは、まさに責任の理論であった。彼の責任論を包括的に解釈し、そこからありうべき「人間の像」の構築を試みるのが、われわれに残された課題である。

¹ ドイツ語初版のタイトルは『有機体と自由 (*Organismus und Freiheit*)』であり、ヨナスの死後『生命という原理』に改められた。なお、『有機体と自由』に先立って英語版『生命の現象』(初版 1966 年、収録論文に異同あり)が刊行されている。

² もっとも、小田が同論考を執筆した動機は、『責任という原理』におけるヨナスのブロッホ(およびマルクス主義)批判を「いかにも強引な解釈」(小田 2001, 43)だと咎めることにあると考えられる。なお本稿では、原文における強調をゴマ傍点、筆者による強調を丸傍点で示した。

(5) 参考文献

- Bongardt, Michael, u. a. (Hg.), *Hans Jonas-Handbuch. Leben – Werk – Wirkung*, J.B. Metzler, 2021. [=HB]
- Jonas, Hans, *Technik, Medizin und Ethik. Zur Praxis des Prinzip Verantwortung*, Suhrkamp, 1987. [=TME]
- , *Philosophie. Rückschau und Vorschau am Ende des Jahrhunderts*,

Suhrkamp, 1993. [=PRV]

— — , *Das Prinzip Leben. Ansätze zu einer philosophischen Biologie*,

Suhrkamp, 1997. [=PL]

— — , *Das Prinzip Verantwortung. Versuch einer Ethik für die technologische Zivilisation*, Suhrkamp, 2003. [=PV]

Levy, David J., *Hans Jonas: The Integrity of Thinking*, University of Missouri Press, 2002.

Schmidt, Jan C., „Technikphilosophie“, in: HB, S. 69-74.

小田智敏「自然と技術——ハンス・ヨナスのブロッホ批判の検討」、『ヘーゲル哲学研究』第7号、2001年、38-51頁

久保健太「ディープ・エコロジーからヨナスへ——自然に対する人間の責任の基礎づけ——」、『哲学の探求』第51号、2024年、89-101頁

品川哲彦「技術、責任、人間——ヨナスとハイデガーの技術論の対比」、『Heidegger-Forum』第7号、2013年、110-122頁

ベーコン『ノヴム・オルガヌム（新機関）』桂寿一訳、岩波文庫、1978年

(京都大学)